

フォーラム 秋田内陸縦貫線の再生を考える

主催 鷹巣阿仁 青年会議所

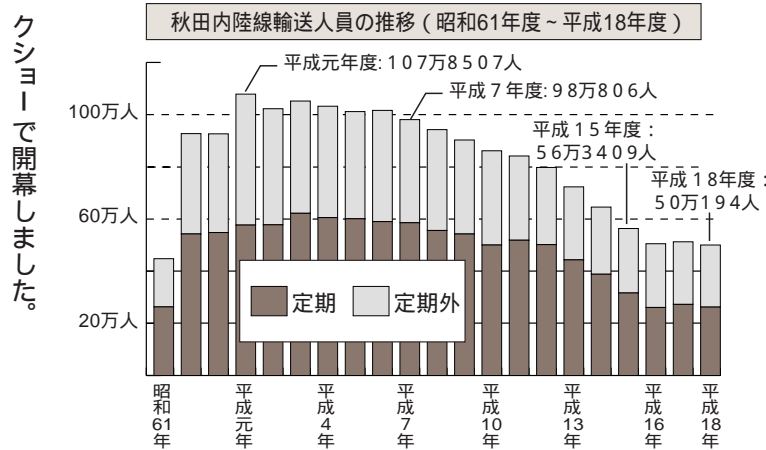
「秋田内陸縦貫鉄道の再生で北秋田の活力を取り戻そう！」

厳しい経営が続いている秋田内陸線の再生について語り合うフォーラム（討議会）「秋田内陸縦貫鉄道の再生で北秋田の活力を取り戻そう！」が10月27日、市産業祭でにぎわう鷹巣体育館で開かれ、鉄道アイドルのトークショーや識者によるパネルディスカッションなどで、同鉄道再生の可能性を探りました。



地域活性化のために内陸線は欠かせない 青年会議所

主催は鷹巣阿仁青年会議所大森光信理事長。秋田内陸線は、平成元年の全線開業時の約108万人をピークに乗車人員が減少を続け、平成15年度以降は60万人を割り込んでいます。また、平成元年度には1億5千万円だった経常損失も同12年度には3億4千3百万円に増加、再生協議会の「5カ年計画」などに基づく経営努力にもかかわらず、18年度には2億6千万を超える損失が発生し、存



PRで全国の鉄道ファンを取り込んで 木村さん

新幹線と内陸線普通列車を乗り継いで会場入りしたという木村さんは、「沿線の景色は最高。窓の外を眺めてばかりでじっと座っていられたかった。2時間の旅が15分ほどに感じた」と、内陸線の魅力と自身のマニアぶりを紹介していました。

また、「内陸線に何が必要？」との会議所メンバーの質問には、津軽鉄道のストーブ列車や写真集も出した



「これだけ魅力的な沿線風景のある内陸線の廃止は考えられない」全国の鉄道ファンを取り込んでと話す鉄道タレントの木村裕子さん(トークショーで)

和歌山電鉄貴志川線「貴志駅」の「猫」の駅長、名産の「ぬれ煎餅」を売って廃線の危機を乗り越えた千葉のローカル線・銚子電鉄の例などを紹介し、「比立内の紅葉など、この路線には魅力がいっぱい。東京で開かれた鉄道の日イベント(10月14日)には15万人もの鉄道ファンが訪れるが、そのファンを取り込んだら。この路線ならではの魅力をPRし、県外からお客さんと呼んでほしい。廃線なんて考えられない」と、自らアイデアを提案しながら存続運動の盛り上がりに期待していました。

内陸線を守ることは地域を守ること 大徳氏

この提言を受け、パネラーからは「廃線になりバス運行に転換になると、さらに利用者が減少し、今度はバス路線の存続が危なくなる。その結果、地域交通全体や観光面に影響が出、限界集落が深刻化する。内陸線を守ることは地域を守ることと同じ(大徳氏)」。観光客は増えているが、経営の状況はかなり厳しい。乗車運動にも努めているが、市職員の利用でも定期利用やフレックスタイム導入が進んでいない状況。また、利用者の多い地域と角館・鷹巣地域、また高齢者とマイカー利用者間での運動に対する温度差も大きく、心配している(竹村氏)。

市民1人年間3回の乗車運動にご協力を 竹村氏

ディスカッションの最後で竹村氏からは、「内陸線の存続については損益論だけでは成り立たない。しかし、そのことを理解してもらうためには熱意を示すための具体的な数字が必要。沿線住民の一人ひとりが年間3回利用してもらえればその目標を達成できる。ぜひ「協力を」との呼びかけがあり、来場者も拍手で応えていました。



再生計画の目標達成には、沿線住民一人ひとりの協力が必要です(写真は、乗車運動として今年7月に行われた栄婦人会・JA女性部栄支部の内陸線での旅行)

再生のための具体的なプランを提言 青年会議所

続く第2部では、秋田内陸縦貫鉄道(株)代表取締役専務の竹村寧氏、内陸線サポーターの大徳耕一郎氏、JTBパブリッシング(株)常務取締役の安齋三三男氏、空間デザイナーの櫻田勝也氏の4人がパネラーとして参加、大森理事長の司会でパネルディスカッションが始まりました。自己紹介などの後、会議所メンバーが、鉄道施設は自治体が受け持ち、鉄道会社は列車運行に特化する経営の「上下分離方式」市民やサポーターも経営に参加できる、第4セクタ